

強化、自律性、国際化：21世紀における大学のあらたな任務

「日独における高等教育改革 - 評価と将来構想」というテーマを掲げて、2006年2月28日に、国公立私立大学団体国際交流担当委員会協議会（JACUIE）とドイツ学長会議（HRK）は共同で高等教育政策についてのシンポジウムを開催し、両国における今日の高等教育の展開について互いの情報を交換し意見の交流を図りました。このシンポジウムでの最終到達点として、両国は次の点において合意しました。

研究と教育の中心である大学は、知識社会の発展においてその中心的役割を担うこととなります。このことは政府の採択する行動計画において必ず反映されねばなりません。日独における昨今の高等教育改革は、今後の両国における研究や教育の骨格を形づくることとなります。また同時に、大学に対しては企業や社会からも高まる期待が寄せられています。JACUIEとHRKは、大学の任務である研究と教育の遂行を妨げるものがない、財政面と規則面の支援をその最重要事項であると考えています。

高等教育機関の自律、大学と省庁間の関係の変化、教育の質の保証、国際化は、日独両国の高等教育機関にとっての中心課題であります。

組織および個人の責任と多様性を考慮すると、高等教育機関の実り多い継続的な発展のための重要な方法は「自律性」です。個々の機関の直接の責任においてなされるアウトプット重視の「質の管理」システムは、すべての利害関係者に対して透明性の保証と説明責任を負い、加えて、卒業資格の保証もされなければなりません。高等教育機関は、個別の規範や調査研究の多様なレベルに応じて、独自の戦略、任務、特徴の規定に対する自由が確保される必要があります。

国際的な機関としての大学の役割とは、その土地、地方、国内、国外の様々なレベルにおける、発想と知の伝達と交換に基礎づけられるものであり、「国際化」の目指すところとは、国境を越えた（学生、科学者、大学院生の）相互活動であり、地理的な、そして学際間での、あらゆるレベルでの流動性は、- 大学生から大学院生、若い研究者から熟年の学者にいたるまで - 知の産出、移動、共有、広域化や、技術の開発、そしてアカデミズムの先鋭化のためには必要不可欠であるのです。こうした流動性を支えていくためには、すべての学問分野へひらかれたフレキシブルな運営資金の手段への展開がなされなくてはなりません。

同時にまた、高等教育における「文化、言語の多様性」は、大学の内そして国と国の間において、大学という文化を規定する主要な要素であります。

そして、使用する言語はその機関の方針に因ることになります。グローバルな認知よりも相互の理解によって、文化の多様性は維持され、その流動性は支えられていかなければならないも

のなのです。

国公立大学団体国際交流担当委員会協議会とドイツ学長会議は、日・独間の学生と研究者の交流を支援し、共通の関心に基づくさらなる対話を続けていくことで合意しました。

2006年3月1日、東京にて。